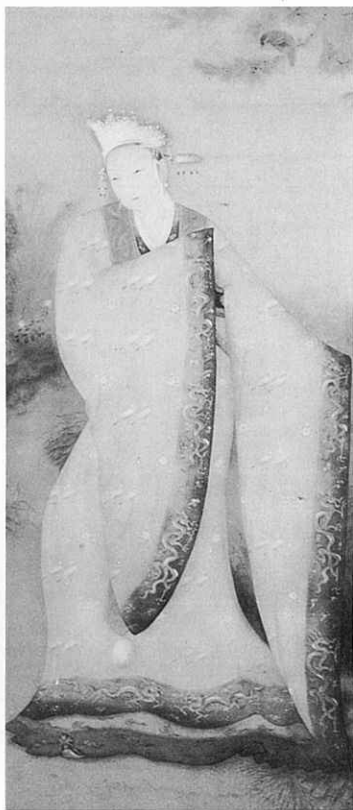


# 佐賀県立博物館報 No.54

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



調鞠図 堂本印象筆

目次	○調鞠図 堂本印象筆.....	1
	○「近代の日本画展」開催要項・出品目録.....	2~3
	○出品作品.....	4~6
	○佐賀出身の近代日本画家たち—雅成・介堂・謙次郎.....	5
	○師匠住吉広賢のことなど 高取雅成.....	6
	○佐賀県内所在博物館等施設紹介.....	7
	○行事のお知らせ.....	8

## 「近代の日本画展」開催要項

名称 近代の日本画展——細川コレクションを中心に

主旨 明治11年来日したアーネスト・フェノロサに指導者としての才能を認められた岡倉天心は、それまでの日本画の革新につとめた。そのもとは横山大観、下村観山、菱田春草等多くの俊秀が集まり、彼らがやがて日本美術院を構成すると共に、日本画壇は新たな展開を遂げて行った。

本展は、この時期に活躍した代表的な作家たちの作品を、日本画の代表的収集家であった細

川家のコレクションを中心に求め、あわせて郷土出身の日本画家、高取推成等の作品も展示して、広く県民の日本画に対する理解を深めようとするものである。

主催 佐賀県教育委員会 佐賀県立博物館  
会場 佐賀県立博物館  
会期 昭和56年10月8日(休)⇨11月3日(休)  
(休館日10月12日、19日、26日)

図録発行 展示作品に関する図録を発行する

観覧料 一般 400円 (300円)

大、高生 250円 (150円)

中、小生 150円 (100円)

( ) 内は団体料金 団体は20名以上

### 作品目録

No.	画題	制作年	品 質	形 状	法 量
<b>竹内 栖 鳳</b> 元治元年(1864)～昭和17年(1942) 京都府生					
1	雲山齋寺	明治45年頃	絹本墨画	掛 幅 装	153.5× 51.0
<b>寺 崎 広 業</b> 慶応2年(1866)～大正8年(1919) 秋田県生					
2	月夜山水	明治35年	絹本墨画	掛 幅 装	141.0× 68.0
<b>横 山 大 観</b> 明治元年(1868)～昭和33年(1958) 茨城県生					
3	曳 舟	明治34年	絹本墨画淡彩	掛 幅 装	118.0× 50.0
4	寒山拾得図(合作)	明治40年頃	紙本墨画淡彩	掛 幅 装	170.0× 82.0
5	月 明	大正6年頃	紙本墨画	掛 幅 装	147.0× 31.0
6	比良山の月	大正15年	絹本着色	掛 幅 装	54.3× 72.2
7	遊 魚 園		紙本墨画	扇 面	長25.5
8	山水漁舟図		紙本墨画	扇 面	長27.0
<b>下 村 観 山</b> 明治6年(1873)～昭和5年(1930) 和歌山県生					
9	大原御幸繪巻(下図)	明治41年	紙本墨画(一部淡彩)	巻 子 装	53.0×790.0
10	春日の朝	明治45年	絹本着色	掛 幅 装	120.0× 51.0
11	一休禪師	大正7年	絹本着色	掛 幅 装	149.3× 58.5
12	花 卉 図	大正14年	絹本着色	屏風六曲一隻	各 109.0× 41.5
13	老 松 図		紙本金地着色	扇 面	長25.7
14	撫 子 図		紙本金地着色	扇 面	長25.7
<b>川 合 玉 堂</b> 明治6年(1873)～昭和32年(1957) 愛知県生					
15	彩 雨	昭和15年	絹本着色	掛 幅 装	88.0×117.6
<b>菱 田 春 草</b> 明治7年(1874)～明治44年(1911) 長野県生					
16	平 重 盛	明治35年頃	紙本着色	掛 幅 装	55.4× 97.0
17	秋 木 立	明治42年	絹本着色	掛 幅 装	119.3× 50.0
18	落葉(未完成)	明治42年	紙本着色	屏風六曲一双	各 150.7×357.0
<b>木 村 武 山</b> 明治9年(1876)～昭和17年(1942) 茨城県生					
19	祇女祇女	明治41年	絹本着色	掛 幅 装	179.0× 97.0
20	椿園(表) 蔦紅葉(裏)		紙本金地着色	扇 面	長33.0
<b>平 福 百 穂</b> 明治10年(1877)～昭和8年(1933) 秋田県生					
21	豫 讓	大正6年	絹本着色	屏風六曲一双	各 172.0×373.0
22	松林帰牧	大正8年	紙本着色	掛 幅 装	166.7× 75.8
23	老 松 図		紙本金地着色	扇 面	長24.0
24	江上帰帆図		紙本墨画	扇 面	長24.0
<b>鍋 木 清 方</b> 明治11年(1878)～昭和47年(1972) 東京都生					
25	花吹雪・落葉時雨	明治41年	絹本着色	掛幅装(双幅)	各 157.7× 70.6
26	抱一上人	明治42年	絹本着色	額装(三面)	(左・右)84.5×12.5 (中) 40.5×31.0
<b>富 田 溪 仙</b> 明治12年(1879)～昭和11年(1936) 福岡県生					
27	仙崖禪師像	大正7年	絹本墨画	掛 幅 装	97.5× 33.8
<b>今 村 紫 紅</b> 明治13年(1880)～大正5年(1916) 神奈川県生					
28	孫 悟 空	大正3年頃	紙本着色	掛幅装(三幅対)	各 127.0× 41.5
<b>小 林 吉 径</b> 明治16年(1883)～昭和32年(1957) 新潟県生					
29	鶴と七面鳥	昭和3年	紙本着色	屏風二曲一双	各 169.2×191.6
30	孔 雀	昭和9年	紙本着色	屏風二曲一隻	166.8×243.0
31	鶉	昭和10年代	絹本着色	掛 幅 装	94.3× 24.6
32	スケッチ・北支	昭和16年		画稿16枚	各 35.0× 55.7
33	スケッチ・画稿			折本1冊	41.2× 39.5

No.	画題	制作年	品質	形状	法量
<b>安田 鞞彦</b> 明治17年(1884)～昭和53年(1978) 東京郡生					
34	聚楽茶亭	明治38年	絹本着色	掛幅装	111.3×69.1
35	守屋大連	明治41年	絹本着色	掛幅装	150.5×57.2
36	黄瀬川陣面葛	昭和15・16年	紙本墨画・鉛筆	マクリ	各 150.7×110.4
<b>前田 青郁</b> 明治18年(1885)～昭和52年(1977) 岐阜県生					
37	票	昭和5年	紙本金地着色	屏風六曲一双	各 168.5×364.6
<b>川端 龍子</b> 明治18年(1885)～昭和41年(1966) 和歌山県生					
38	霊泉由来	大正2年	布・着色	額装(三面)	(左・右)180.0×68.0 (中)211.5×68.0
<b>壁山 南風</b> 明治20年(1887)～ 熊本県生					
39	霜月頃	大正2年	紙本着色	屏風二曲一双	各 178.0×178.0
40	粟と浦島草園屏風	大正12年	紙本着色	屏風二曲一双	各 174.0×170.0
41	秋草園		紙本金地着色	扇面	長33.0
<b>中村 岳陵</b> 明治23年(1890)～昭和44年(1969) 静岡県生					
42	宝粧獅子図屏風	昭和3年	絹本着色	二曲一双	各 173.0×179.5
43	初耘法輪	昭和35年	紙本着色	額装	45.0×36.0
44	天女	昭和35年	紙本着色	額装	32.0×42.0
45	麻耶夫人	昭和35年	紙本着色	額装	36.5×44.5
<b>堂本 印象</b> 明治24年(1891)～昭和50年(1975) 京都府生					
46	調鞠図	大正10年	絹本着色	掛幅装(双幅)	各 205.5×90.5
<b>横山 大親・下村 観山・竹内 栖風合作</b>					
47	観音猿鶴	明治45年	絹本着色	掛幅装(三幅対)	各 139.2×41.5
<b>横山 大親・勲 題画</b>					
48	朝晴雪	大正8年	絹本着色	掛幅装	26.6×23.8
49	田家早梅	大正9年	絹本着色	掛幅装	29.1×26.6
50	社頭暁	大正10年	絹本着色	掛幅装	33.0×27.0
51	旭光照波	大正11年	絹本着色	掛幅装	39.0×51.0
52	晚山雲	大正12年	絹本着色	掛幅装	63.0×51.0
53	山色連天	大正14年	絹本着色	掛幅装	27.0×35.0
54	河水清	大正15年	絹本墨画	掛幅装	78.0×42.0
55	山色新	昭和3年	絹本着色	掛幅装	28.0×43.0
56	田家朝	昭和4年	絹本着色	掛幅装	42.4×57.4
57	海辺巖	昭和5年	紙本墨画	掛幅装	31.0×21.5
58	社頭雪	昭和6年	紙本着色	掛幅装	31.5×31.0
59	晚雞声	昭和7年	紙本墨画	掛幅装	44.7×60.2
60	朝海	昭和8年	絹本着色	掛幅装	44.0×57.0
61	池辺鶴	昭和10年	絹本着色	掛幅装	42.4×51.0
62	海上雲遠	昭和11年	絹本着色	掛幅装	51.0×52.0
63	田家雪	昭和12年	絹本墨画	掛幅装	41.0×51.0
64	神苑朝	昭和13年	絹本着色	掛幅装	41.0×51.0
65	朝陽映島	昭和14年	絹本着色	掛幅装	42.0×56.0
66	漁村曙	昭和16年	絹本着色	掛幅装	35.0×45.0
67	連峰雲	昭和17年	絹本着色	掛幅装	35.0×42.0
<b>高取 稚成</b> 慶応3年(1867)～昭和10年(1935) 佐賀県生					
68	四家文軒	大正4年	絹本着色	掛幅装(四幅対)	各 146.0×56.7
<b>納富 介堂</b> 弘化元年(1844)～大正7年(1911) 佐賀県生					
69	竹下遊鶴園	大正4年	絹本着色	掛幅装	141.0×31.0
70	鍾馗虎園	大正5年	絹本着色	掛幅装	128.0×37.0
71	寿老人園	大正5年	絹本淡彩	掛幅装	168.0×36.0
72	三聖の園		絹本着色	掛幅装	127.0×45.0
73	高士製蓮園		絹本着色	掛幅装	126.0×36.5
<b>野口 謙次郎</b> 明治31年(1898)～昭和22年(1947) 佐賀県生					
74	雪の野尻湖	大正12年	絹本着色	掛幅装	84.5×122.2
75	想い	大正12年頃	絹本着色	額装	144.2×69.5
76	梅	大正13年	絹本着色	掛幅装(双幅)	各 134.0×55.1
77	山間の溪	大正13年	絹本着色	掛幅装	132.3×55.0
68	富士山		絹本着色	掛幅装	130.0×40.8
79	溪流		紙本着色	屏風二曲一隻	145.9×171.6

No.68 「四家文軒」は宮内庁所蔵

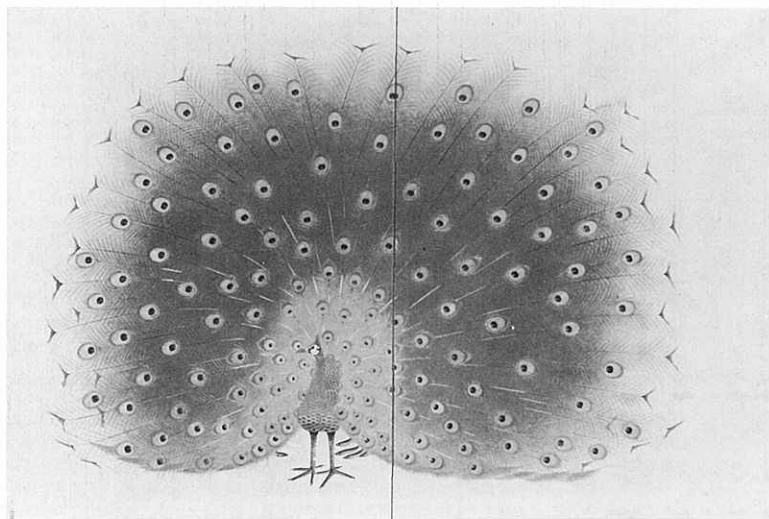
No.74 「雪の野尻湖」は東京芸術大学芸術資料館所蔵

## 表紙説明 調鞠図 堂本印象筆

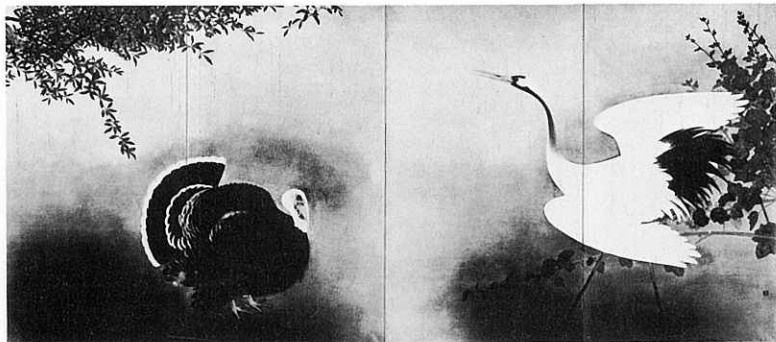
大正10年の第3回帝展で特選となった作品で、調鞠とは蹴鞠ともいい、平安時代、貴族の間で盛に行われた遊びである。蹴鞠をする庭の四隅に、桜、柳、松、楓を植えるという。しかし、この絵の人物は、遠い異国の趣きを漂わせて、優美である。



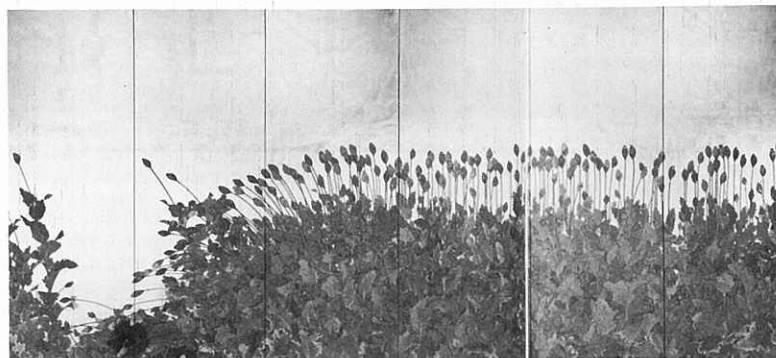
15 彩 雨 川合玉堂筆



30 孔 雀 小林古径筆



29 鶴と七面鳥 小林古径筆



37 罌粟(左半双) 前田青邨筆

佐賀出身の近代日本画家たち 一 稚成・介堂・謙次郎一

今回の日本画展では、佐賀県出身の日本画家を時代および画風の違いによって3名を選び展示するが、これら3名の画家の略歴は次のとおりである。なお、高取稚成の「師匠住吉広賢のことなど」は晩年「雙杉」にのせた彼の回想談である。彼の画歴を知るうえで興味ある記事であるので、ここに転載することとした。

高取 稚成 (1867～1935)

慶応3年(1867)5月19日神埼郡坂本中尾に生まれる本名を熊夫という。画号は初め熊若。明治41年以降稚成(わかなり、又はちせい)とする。別号に山楼戸、山桜がある。明治14年頃住吉広賢について大和絵を学ぶ。明治16年広賢没後、土佐派の山名貫義に教えを受ける。また、有職故実を松原佐久に学ぶ。

歴史人物画を得意とし、大正7年以降日本美術協会の

審査員、大正10年から同13年まで帝展の審査員をつとめた。最後の土佐派の画家である。昭和10年(1935)1月30日死去。

納富 介堂 (1844～1918)

弘化元年(1844)4月3日、小城町に生まれる。名は介次郎、号を介堂とする。16歳のとき、納富家を継ぐ。初め、長崎の鉄翁、逸雲について南画を学ぶ。また、明治4年には、横浜で油絵を学んだという。明治11年、堀田真、河瀬秀治らと竜池会設立への産声をなした。晩年は再び文人画に親しんだ。他方、日本の工芸界で指導的な役割を果たしている。大正7年(1918)3月9日死去。

野口謙次郎 (1898～1947)

明治31年堀田町に生まれる。鹿島中学校をへて、大正12年東京美術学校日本画科を卒業した。在学中から帝展に入選し、風景画を得意とした。東京画壇の中堅として活躍。昭和22年5月21日死去。



68 四家文鉢(四幅対) 高取雅成筆

師匠住吉広賢のことなど

高取雅成

広賢と私の父が明治八、九年の頃一役所一内務省一の同僚の間柄であったので、或時、広賢が私の家に来た時、丁度私が雁皮紙に模写した読本の「白縫物語」の挿絵を見て、この兎は器用そうだから私の家へよこしてはどうかというふうなことで広賢の許へ入門したというわけである。たしか、明治十四年私が十四の頃であった。其頃師匠の塾は麹町の飯田町四丁目、塾に寝起きするのは私一人きりであった。先ず新しいものから教えてゆき既に絵がわかる様になってから古いものを習はせるというやり方であったらしいが、私がついてから二年程して師匠は死んでしまったので十分研究する暇がないうちに師匠と別れたのである。

私が塾へ入った時は師匠は四十七、八の壮年であった。背は稍高い方であった、一寸猫背で眼の大きな人で髪は其頃の多くの画家がしていた梳髪で黒い肥顔だけ長く伸ばしていた。非常に敬神家で画室の床の間には一杯に神棚を祭ってあって、師匠は毎朝之を拝してから絵筆を採ったものである。住吉学画所なる画学校を創設して自ら其指導の任に当たることになった。之は私が塾へ入って間もなくの明治十五年の事で、開校式には来賓として対馬の宗伯爵や四国大洲の加藤伯爵、それから黒川真頼氏や小中村清矩、有賀長隣氏を始め、当時の国学者の人々が大分見えてなかなか盛大なものであった。ところが此学校も翌十六年の二月に師匠が死んだために、後はしばらく山名貫義さんが引受けてやられたが続かないでとう

とう廃止してしまっした。山名さんよりも年も一つ下であった。

師匠は又フェノロサとも早くから親交があった。フェノロサは、住吉家にあった沢山の粉本を調査したり、又古いものの模写等を依頼して、師匠には、相当に敬意を払って居たように思う。之は無論鑑画会などの成立以前で、フェノロサが、岡倉さんや芳崖翁などと結ぶ一寸前のことである。師匠の病氣は腸捻転であったが、此時もフェノロサは大変心配して大学病院へ入る手続等も奔走してくれたが、遂に回復せず四十九歳の壮年で死んだのであった。私は師匠からは大変に愛された。弟子として当時師匠の左右に侍したのは私一人であったし絵の後は私が襲うこととなり、住吉の家の名目には別家の板屋桂舟氏が預かって今日に及んでいる訳である。明治十七年二月フェノロサによって鑑画会が出来る。

三月四日の鑑画会が浅草の安行寺で開かれたとき、私も出品したことを覚えている。

明治二十年から二十一年迄は皇居御造営事務局へ入った。ここには、故人の小堀鞆音さんや鶴沢探岳、端館栄川、山名繁太郎、立岡快雪の諸氏や村上委山氏等も一所であった。事務局は、山高信雄という人が掛長であったが、二十一年の二月に此事務局は閉鎖されて、小堀さんは暫く農商務省にいられたが、やがて、雑誌小国民等の挿絵に転じて筆を採り、私は寧ろ安きついで陸地測量部へ入ったという様な次第であった。

(雙杉8号 昭和9年6月)

県内博物館案内 その10  
唐津市歴史民俗資料館



- 所在地 唐津市海岸通8171番地
- 交通の便 バス停「妙見」「海岸通」より歩いて5分  
西唐津駅より歩いて10分
- 開館時間 午前9時～午後4時
- 休館日 月曜日・国民の祝日・年末年始（12月29日～1月3日）
- 入館料 無料
- 設置の目的  
高度の経済成長に伴う生活様式の急速な変化は、これまで農村や漁村・離島や町方等で使われてきた特色ある生活諸道具や生産器具等を、消滅の危機にさらそうとしておられ、これ等の民俗資料は早急に収集、保存する必要にせまられてきた。さらには失なわれつつある遺跡・遺物・古記録・文書などの歴史資料等も併せて保存・活用し、郷土の歴史と文化に理解を深めるために、歴史民俗資料館を設置することになった。

○設立の経過と特色

風光明媚な唐津・東松浦地方は、地理的な位置から朝鮮半島や中国との関係も深く、大陸文化交流の門戸として重要な位置をしめ、朝鮮から渡ってきた青銅器など地下の正倉院とよばれる程豊富な埋蔵文化財を数多く残している。その中でも唐津港は縄文時代の海底遺跡として有名であり、近代においては唐津炭田の積み出し港として栄えた。

唐津市の歴史民俗資料館となった建物は明治41年、三菱合資会社唐津店として建てられた。大正時代は三菱商事、その後、軍の機関などに使われ、昭和26年唐津海上保安部庁舎となり、昭和47年に市の所有となった。この由緒ある建物を後世に残すことは市民の唐津を愛する心を残すことになると考え、昭和52年には建物にかかる調査報告書を出し、文化庁の指導を受けて忠実に原形に修復し昭和53年には市の重要文化財として指定を受けた。

この歴史民俗資料館は唐津市だけではなく東松浦郡も

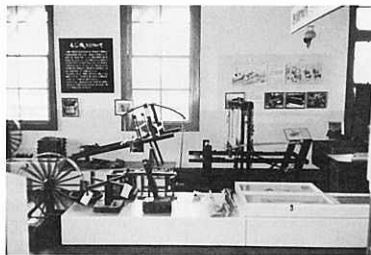
含め、原始・古代の埋蔵文化財の出土品や漁労具等の産業・生活関連の資料を常設展示するほか、年1回の企画展により郷土の歴史を紹介している。最近では、漁労具関係の資料調査及び収集・保管に力を注いでおり、これからの活動が期待される。

○施設の概要

床面積	本館1階	ベランダ、玄関ホール	428.42㎡
	本館2階	ベランダを含む	413.37㎡
	便所棟、渡り廊下を含む		75.46㎡
	別棟倉庫、渡り廊下を含む		29.06㎡
	総床面積		945.31㎡

○展示内容

- 1、唐津内外での先土器時代から古墳時代までの遺跡
  - 旧石器時代…旧石器時代末期の組み合わせ石器
  - 縄文時代…採集文化をしめす石器・土器
  - 弥生時代…農耕文化をしめす土器・石器・木器・青銅器
  - 古墳時代…古墳の副葬資料及び生活関係資料
- 2、唐津領内、海・陸の主要産物の生産のようすを伝える絵図写真とその諸道具。
  - 紙すき スキフネ、スゲタ、帳板
  - 捕鯨 鯨切ホーチョウ（大切・小切）  
ジョーガメ（鯨金庫）
  - 機織り 糸クリ車、手機、地機、養蚕道具、モジオリ製品
  - 採炭 石炭、ツルハシ、カキイタ
  - 焼物 登り窯用具、製作用具、古唐津の陶片
  - しじみ取り テボ、ザル、ジョレン
  - その他 馬渡島駒捕り、海女、鮎魚梁之図等の写真
- 3、古い家具や生活用品、農機具  
タンス、水屋、オゼン、糸車、オヒツ、自在カギ、ヤゲン、唐臼、唐箕、ガンヅメ、スキ、水車等



行事のお知らせ

常 設 展

佐賀県の歴史と文化展	7月8日～9月27日 12月13日～3月31日	佐賀県の地質や自然および先史時代から現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について、系統的に資料を展観する。
------------	----------------------------	--

企 画 展

展覧会名	会期	内 容	展覧会名	会期	内 容
理科作品展 佐賀市 佐賀県	9月13日～ 9月17日	小・中・高校生による 理科資料、作品を展示	佐賀県高等学校 芸術祭書道・美術 部門展	11月28日～ 12月4日	高校芸術祭の一環として、 高校生の美術、書道部門の作品展
	9月19日～ 9月25日		佐賀県学童美術展	12月13日～ 12月18日	県内の小・中学校生徒の 絵画・版画・デザイン の作品展
近代の日本画展	10月8日～ 11月3日	日本画の代表的収集家 であった細川家の所蔵 品約60余点を中心に、 横山大観・菱田春草・ 下村観山・前田青邨・ 小林古径・安田靉彦を はじめ、佐賀県出身の 高取雅成・納富介堂・ 野口謙次郎らの作品を 合わせ80余点を紹介す る。	書 初 展	1月17日～ 1月21日	小・中・高校生及び一 般公募の書初展
			佐賀県勤労者 美術展	1月30日～ 2月4日	佐賀県が県内の勤労者 から公募した美術展。 日本画・洋画・写真・ 書・工芸約 250点
			九州グラフィック デザイン展	2月9日～ 2月14日	九州及び沖縄のグラフ ィックデザイン作家に よる作品約 100点
			佐賀大学教育学部 美術工芸科卒業 制作展	2月20日～ 2月24日	佐賀大学の卒業制作品、 絵画・彫塑・工芸の各 部門を展示
佐賀県美術展	11月14～ 11月23日	県内公募の日本画・洋 画・書道・写真・工芸・ 彫塑・デザインの7部 門約 350点	岩永京吉・ 太田香雲展	3月11日～ 3月14日	佐賀大学を退官される 岩永京吉先生の日本画 と太田香雲先生の書を 一堂に展示

- 休 館 日 ●常設展 原則として月曜及び祝日の翌日  
●企画展 原則として月曜日  
●年末・年始12月28日～1月4日
- 開 館 時 間 9時～4時30分（入館は4時まで）
- 観 覧 料 ●常設展 大人50(30) 大・高生30(20) 中・小生20(10)  
( )内は団体20名以上  
特別展の場合は別に定めます。

※都合により上記計画を一部変更することがあります。

博物館報	第 54 号
発行年月日	昭和 56 年 9 月 1 日
編 集	永 原 正 隆
発 行	佐賀市内 1 丁目 15～23
	佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社